

二重徴用者遺家族 安明福さんの手記 (2001.03.01)

資料の提供者：安明福 (資料作成者本人)

資料掲載情報：2001年(推定)。掲載誌は不明。

資料の翻訳者：洪ジョンウン(2015/04/15)

誰の責任であり、誰の過ちでありましょうか

安明福/二重強制徴用者を探す委員会委員長
(手書きのメモ：元委員長、サハリン二重徴用鉱夫遺家族会)



私たちには訴訟する権利がある

私は世界の人々に次のような事実を申し上げたい。1939年に私の父親は、日本政府の命令によって故郷に家族を残したまま故郷から離れ、玄海灘を渡り、「樺太」北名好「豊畑」炭鉱に強制連行され、酷寒の異国の地で炭鉱労働者として大変な苦役を強いられた。

故郷に残された私たち家族は子どもが多く、母は一人の身で4人の子どもを養っていくことができなかった。父のいない生活とは、ぼろをまとい食うにこと欠く毎日であったのだ。1940年6月、母は幼かった私たち兄弟4人を連れて父がいる「樺太一からふと」名好「豊畑」炭山に来るようになった。そこはすごい山奥で、数十軒のバラックの「長屋」が並んでいるだけであった。そのように私たち家族が故郷から離れ、悔恨の「樺太」に定着し暮らすようになった。「樺太」は特に冬になると非常に寒く、また、吹雪が吹きまくる時は西も東も分からず、一步も踏み出せないほどであった。

それにも関わらず、私たちはまともな靴一足履いたことなく、服も下着を着たことがない状態で育てられた。そのような窮乏の炭山村へ私たち家族は2年契約で連行されたのである。

父は最も危険と言われる採炭場で炭夫として苦役に苦しんだ。その時は配給でもらった食糧ではろくに食べることができず、一日10時間という重労働を強いられていた。しかし、父はいつも子供に対して格別に配慮した。自分はあまり学校と縁がなかったものの、子どもの将来に関してはいつも学校に行かせると口癖のように話していた。私たちには学校に行ったら一生懸命に勉強するんだよと励ましてくれたこともある。当時、私は日本学校に入学し、習っていたが、名前も日本式に変わって「安田」と呼ばれ、朝鮮語を使わず日本語で文字を教わったため、学校の勉強は非常に難しく感じられた。また、日本人の子どもたちと一緒に学んでいたが、彼らはずっと私たち朝鮮人の子どもを「朝鮮菜っ葉」と呼びながら、侮り、見下し、いじめた。このような差別は幼い私にも我慢できないほどつらかった。あらゆる蔑視や悲しみを越し、私たちは生き続けなければならなかった。零下40度を指す寒い「樺太」に引っ張られ、腹いっぱい食べることもできないぼろをまとう生活をしながら、日本人からは圧迫を受け、また、

自由なき生活を強要されたことは、国を奪われた民族であったために遭わせられる悲惨な現実であった。これが国を失った民族の受難であったのだ。

冬になると暖炉をたき、部屋を暖めようとしていたが、それもしばらくしては火が消え、部屋の温度は零下 5-6 度まで下がり、水桶の水も固く凍った。

そのような家で暮らさなければならなかった上に、配給された食糧は一か月分とは言え、いつも 6-7 日間の分は足りない量であったため、一日三食の代わりに二食だけと取るという、食べ物に飢えた生活を送った。また、父は家族を養うために大変な仕事を一生懸命にしたが、現金を手握ることができず、給料のほとんどは配給の金、強制貯金、協和会費などで支払わせられた。但し、わずかな小遣いは出た。そのようにしながら企業主は、契約期間が終了するとすべてを清算するよと言って欺した。

2 年の契約が終わると、再び契約の延期を強要されたため、新たな契約を結ばなくてはならなかった。契約を延期すると、6 年後には金をたくさんもらえるとされた。しかし、そのすべてが欺瞞、そして虚偽であった。そのように私たちの父は苦役と、炭夫としての労働から免れることができなかった。そればかりか、栄養欠乏で病を患ってもまともな病院一つなかったために、ろくな治療でさえ受けることができなかった。また、風呂も公衆浴場しかなかったため、様々な皮膚病などで苦しむ日々を過ごすなければならなかった。

しかし、そのような辛い生活の中でも父と一緒に暮らせていた時が幸せであった。

家族みんなが共に悲しみや楽しみを語り合いながら、同じところで睦まじく過ごすということはとても幸せであった。ところが、そのような生活も長く続かなかった。日本帝国主義者たちは太平洋戦争を起こし、戦争の勝利のためと言いながら私の父を日本国内の最も危険と言われた現「山一」炭鉱へ第 2 次徴用で連行したためである。「樺太」の石炭を日本へ運び続けられない状況に陥ると、日本は「樺太」炭鉱を閉鎖し、炭夫たちを日本内地の炭鉱へ強制連行したのである。これが 1944 年 8-9 月に行われたことで、「豊畑」炭山だけでもほぼ 150 人の朝鮮人炭夫たち(原文ママ)が急に連行させられた。彼らは手荷物一つだけを持ったまま、「樺太」に家族を残し、引っ張られたのである。それは私たち兄弟にとって二度目に迎えた、父のいない、展望の見えない生活であった。私たちは日本政府によって永遠に父を奪われてしまったのである。

当時、母は 39 歳の若い女性であったし、長男である私は 13 歳であった。父は別れる前、「お前は男だ。残る家族に対する責任はお前に譲り、私は「国」のために発つ」と私に話した。

これが最後の父の遺言となるとは考えもできなかった。

可哀そうな父は妻子を永遠に失い、また、可憐で悔恨の運命を持たせた母と幼かった私たち兄弟は貴重な青春を犠牲とした。この徴用連行が生み出した問題が、今日において国際問題となっているサハリンのコリアンの問題である。

1945 年 8 月 6 日と 9 日に日本広島、長崎で起きた原子爆弾の投下により、日本は無条件降伏をし、「樺太」にはソ連軍が進駐、朝鮮人も解放された。解放の嬉しさは一瞬のこと、13 歳であった私は母と一緒に弟と妹を食わしていくことに悩まれ、夜になっても眠れず、不安の月日を過ごした。しかし、生き残った時こそ父とも会えるんだという希望を持ち、一生懸命生きて行こうと誓った。ソ連軍が進駐してきたら、日本人は疎開をするといって山に一時非難をし、私たちも彼らと一緒に手荷物を持って疎開をした。その生活はほぼ 1-2 週間続いたが、当時、日本人たちは朝鮮人を「スパイ」と言いながら、全員処断することを議論していたそうだ。後で聞いた大人たちの話によると、ソ連軍の進駐が数日遅れた

としたら、多くの無辜の朝鮮人同胞たちが虐殺されたかも知れないそうだ。

日本人は敗戦の混乱の中、朝鮮人の誤りで戦争に負けたという噂を日本人の間に広げた。実際、そのようなデマによる虐殺事件が戦後のサハリンでたくさん起きた。上敷香虐殺事件、瑞穂村虐殺事件が実際に起きた代表的な事件である。



←ポロナISK (上敷香 左の石碑)
で男性 18 人が、犯罪もしていないのに警察署にとじ込められ、一方的に虐殺された。写真はその犠牲者の慰霊碑。

ポジャルスコイエ(瑞穂 右の石碑)→
で妊婦や子どもを含め 27 人の、村人が、隣に住んでいた日本人に無差別殺害された。



ソ連軍が進軍した時、私たちは再び「豊畑」のバラックに戻ってきて生活するようになった。そして、私たちは朝鮮を取り戻し、また、朝鮮学校が設立されると、朝鮮語で文字を学べることができ、初めて太極旗を見るようになった。このようにして私は朝鮮学校 4 年生を卒業した。しかし、7 年制の学校には入学をしたものの、学業を続けることができなかった。父が徴用で連行させられたため、当時、私は仕事に就き、母や幼い弟妹を扶養しなければならなかった。そういう風に生きていかなければならなかった。そのような道しか、当時はなかったのである。戦後直後、食糧難は極めてひどく、衣類も足りなかった。しかし、生き残って父と会い、幸せに過ごそうという希望を抱き続けながら一生懸命働いた。最初は 300 ルーブルをもらって事務所で掃除と火のたきの仕事をし、また、夏には馬に餌を与える仕事をしたが、その後は電工の研修生として会社に入り、電気技術を習うようになった。その時 800 ルーブルをもらったが、それでは大家族を養うには非常に難しかった。当時、1946 年 4 月にはサハリンで食糧難が激甚であった。日本帝国主義下で運んできた予備はほとんど無くなり、ソ連はまだ十分なものを運んでこられず、配給制が続いた。私がもらった 800 ルーブルでは闇市でパン 8 斤を買うことができた。家族はほとんど飢えている生活を送っていた。朝鮮語で「いくら悲痛であろうとしてもお腹が空いたことより悲痛なことはない」という言葉にそっくりの生活であった。

お腹が空いてもお金がなかったために何も買えなかった。しかし、父がいる家の子どもたちは私たち兄弟よりましな事情であった。パン 8 斤分の給料で私たち家族が暮らせたこと自体が奇跡であった。当時はソ連のパン 1 斤が 2kg で、闇市では 100 ルーブルの値段で取引されたことを、サハリンの朝鮮人たちはよく覚えているだろう。ソ連軍によって解放を迎えたが、父の安否は確認できず、私たちは父から言われた、一生懸命に学校で勉強するんだよという言葉も守ることができず、ようやく小学校課程のみ

を終え、その後労働現場に入らなければならなかった。そのつらくて耐えきれない生活の中、14歳であった妹と7歳であった妹が結局、恨み深いこの世を去ってしまった。彼女たちもおそらくあの世で日本政府の過ちをあの世の靈魂に告発しているだろう。私の母は、夫を奪われ、自分の貴重な青春を犠牲としたし、私たち兄弟はそれぞれ、父と永遠に別れてしまう悲劇的な人生を送らなければならなくなった。

父がいる人々は中学校、高等学校、大学まで卒業し、有能な人材に成長したが、私たち兄弟姉妹にはそのような幸運が回ってこなかった。これは、日本政府の戦争政策の産物であったことを、私は世界の人々に伝えている。私たちは半非識字者である。

私の父がそれほど願っていた子どもの就学は叶えず、私たちにとっては一生懸命に学びたいという願いも叶えず、もはや私は80代の老人となってしまった。

戦後の混乱の中でもいつも父が帰ってくるという希望を持ち続けながら、一生懸命に働いてきた。共産主義社会であった時は、「仕事をしない者は食べるな」という規則に従い、私は長男として家族を食わしていくために一生懸命働いたのである。

ずっと父の安否を知らないまま生きてきたが、ソ連のゴルバチョフ大統領の「ペレストロイカ」政策により、戦後45年ぶりに大韓民国を訪問し、夢に見ていた父のことを知るようになった。父は終戦を日本内の炭鉱で迎え、家族がやって来ることを待ち望んでいたが、1948年頃に韓国へ帰国し、故郷でも「樺太」の家族と会うことができず、また、その安否も知らないまま、哀れにも1984年にこの世を去ったということを知るようになった。

私は父のお墓を参り、アボジ、アボジ、アボジと涙声で叫んだが、その音は山なりとなって返ってくるだけで、すでにあの世におられる父の声は聞くことができなかった。

45年の間の涙を流しながら、その間呼ぶことができなかったアボジ、アボジ、アボジの息子の明福が帰ってきましたよと叫んだが、父は何の言葉一つも返すことなく、安らかに永遠の眠りにについているだけである。このような悲劇的な人生を歩ませられた張本人は日本政府であることを、私たちは認識している。そのため、現在、日本の人々がいかにこのように悲惨な歴史を過去のことにさせようとしても、亡くなった方々の靈魂はそれを許さないはずであると思う。

その当時、幼い少年であった私ももはや80代に入った老人となり、余命もわずかとされている。私の願いは日本政府が他民族に、私たちのような悲惨な運命を持つ人々に、補償することであり、私がこの世を去ることになったら、故郷の温かく日当たりのよいところに眠り、この世で一緒にすることができなかった父の傍で、永遠に一緒になることである。

尊敬する一億五千万人の日本人の皆様、上記で述べた歴史的事実は、単なる私の個人的な問題ではなく、私のような運命を持つサハリンのコリアンが抱えている問題であること、現在国際的にも指摘されている問題であることを想起してください。この過去の誤った罪の責任は誰が負うべきであり、また、その被害に関する精神的、物理的補償は誰が行うべきでしょうか。

私たちサハリン・コリアンの徴用被害者たちは、日本政府と日本企業にそれなりの責任があることを強く訴えます。

これは誰の過ちでしょうか。皆さんは私たちの声を聞いておられるでしょうか。私が生きている限り、この問題の解決のために闘い続け、国際裁判においても訴訟してまいりたいと思います。

(手書きのメモ：安明福。大韓民国京畿道安山市(以下の住所は消されている)。2001年3月1日)

누구의 책임이며 누구의 잘못입니까

(전) 안 명 복 / 이종강제징용자찾기위원회 위원장
(사할린 이종강용 광부유가족회)

우리는 소송할 권리가 없다.

나는 세계만민들에게 다음과 같은 사실을 이야기 하련다. 1939년에 우리 아버지는 고향을 두고 현해탄을 건너 일본정부의 징용명령으로 가족을 고향에 둔채 『가라후도』 기따나요시 『도요하다』 탄광으로 강제 연행되어 혹한의 이국땅에서 힘겨운 탄광노동자로 고역을 당하였다.

우리가족은 그때 어린아이들 뿐이었으며, 어머님 혼자서 4명의 자녀들을 먹이고 입혀살릴 길이 없었다. 헐벗고 굶주린 아버지 없는 생활을 하셨다. 그러다가 1940년 6월에 어머님은 어린 우리 형제자매 4명 다 데리고 아버지가 계시는 『화태-가라후도』 나요시 『도요하다』 탄산으로 오게 되었다. 이곳은 아주 산중이었으며, 수십개의 판자집-『나가야』들이 나란이 있었을 뿐이었다. 이렇게 우리가족들이 고향을



(80세) 안명복

떠나 한 많은 『가라후도』에 정착생활을 하게 되었다. 『가라후도』는 특히 겨울의 추위가 심하고, 또 눈보라가 칠때는 앞뒤를 분간할 수 없으며 걸음을 걸을 수 없는 지경이었다.

그럼에도 우리에게는 신발하나 똑똑한 것도 없었으며 옷도 내의란 것을 입어본적 없이 자랐다. 이런 궁핍한 탄산마을로 우리는 2년 계약으로 연행되었다.

또 아버지는 가장 위험한 채탄장에

(原文 韓國語·中略)



1946.25 가족과 함께 찍은 사진

“페레스트로이카” 정책으로 말미암아 전후 45년만에 대한민국을 방문하여 꿈에도 그리던 아버지의 소식을 알게 되었다. 아버지는 종전을 일본내 탄광에 맞이하고 가족이 올 것을 기다리다가 1948년경에 한국으로 귀국하여 고향에서 “가라후도” 가족을 만나보지도 못하고 소식도 모르고 불쌍하게도 1984년에 별세하였다는 것을 알게 되었다.

나는 아버지 산소에 참묘하면서 아버지, 아버지, 아버지 하면서 목매어 불러보았으나 그 소리는 산울림으로 되 돌아올 뿐 이미 저승에 계시는 아버지의 목소리는 들을 수 없었다.

45년 동안에 모인 눈물과 45년동안 불러보지 못한 아버지, 아버지, 아버지 차식 명복이가 돌아왔습니다 라고 외쳤으나 아버지는 아무런 대답도 없이 고히 잠든 영원의 잠을 계속하고 있을 뿐이었다. 이런 비극적 인생의 길을 걷게 한 장본인이 일본정부라는 것을 우리는 잘 알고 있기에 현재 일본인들이

아무리 이 비참한 역사를 과거 역사속에 묻으려고 하여도 영혼들은 그것을 용서치 않을 것이다.

그당시 어린소년이었던 나도 이제야 80길에 들어선 노인이 되었으며 여명이 얼마남지 않았다. 나의 소원은 일본정부가 다시 타민족에게 우리와 같은 비참한 운명을 가진 사람들에게 보상하며, 내가 죽으면 살아서 함께 못하던 나의 아버지 곁에 고향땅의 따뜻한 양지 빛 밑에 영원히 함께 살 것이다.

존경하는 일본의 일억오천만 전국 국민들이여, 이상의 지적인 역사적 사실은 단순한 나의 개인적 문제가 아니라 나와 같은 운명을 가진 사할린 한인들의 문제로서 현재 국제적으로 나서고 있다는 것을 상기시키며 또 이 과거의 잘못된 죄과의 책임은 누가 져야되며 또 그의 피해보상은 정신적, 물질적 보상은 누가해야 합니까?

우리 사할린 한인 정용과 피해자들은 강력히 일본정부와 기업체들은 자기 나름대로 책임이 있다고 봅니다.

이것은 누구의 잘못인가? 당신들은 우리의 목소리를 듣고 있는지요. 우리가 살고있는 한 이 문제해결을 위하여 계속투쟁을 벌이며 국제재판에까지 소송하리라고 합니다.

안명복

대한민국 경기도 []

[]

TEL(031) []

2001년 3월 1일

安明福さんの日本政府への嘆願書

(2010.03.03)

資料の OCR : 藤川正夫 / 機械翻訳の校正 : 小西和治



탄원서 (嘆願書)

1939 년~1945 년 태평양전쟁 중에 당시 일본의 식민지였던 조선반도 남반부 각지역에서 사할린(당시 카라후로) 에 있는 여러 탄광으로 조선인들이 강제연행되어 노동력을 착취당한 것은 만인이 다 아는 사실입니다. 그런데 그 조선인 탄부들 중에는 1944 년 9 월에 또 다시 강제로 이 중징용 당해 일본 내지 대공업지대인 “이바리기현” “큐슈” 의 각탄광들에 배치되어 중노동에 종사한 사람이 있습니다.

1939 年~1945 年、太平洋戦争中に当時日本の植民地であった朝鮮半島の南半部各地域からサハリン(当時樺太)にあった多くの炭鉱へ朝鮮人が強制連行されて労働力を搾取されたことは万人が知っている事実です。ところで、その朝鮮人の炭鉱夫の中には 1944 年 9 月に再び強制的に二重徴用され、日本内地の大工業地帯である「茨城県」や「九州」の各炭鉱に配置されて重労働に従事させられた人々がいます。

그 상황을 자세히 설명하자면 가라후토 내의 탄광에서 생산되는 석탄 중에 절도가 가설되어 있는 지역의 석탄은 사할린 내에서 사용하고, 절도가 부설되어 있지 않은 서해안 “에스로루” 지역(도요하다, 토로 등등)에서 채탄되는 적탄은 선박편으로 일본 본토에 가져다 군수물자를 만드는데 사용했습니다. 그러나 전쟁이 막바지에 몰려 미국의 폭격으로 선박 운송이 불가능하자 이 지역에 있는 조선탄부들을 일본 본토로 데려갔습니다. 당시에 도요하다. 탄광에서만 해도 142 명 가운데 42 명의 탄부들은 춥고 낯설은 이 사할린 땅에 자신의 아내와 어린자식들을 남겨여놓고 갈 수밖에 없었습니다. 그런데 일본사람들은 그들이야말로 태평양전쟁의 후방전사라고 특별히 추켜올렸습니다. 그 때문에 남은 가족들은 기쁜 마음으로 눈물 한 방울 보이지 못하고 남편과 아버지를 전송할 수밖에 없었습니다

その状況を詳しく説明すると、樺太内の炭鉱で生産される石炭の中で鉄路が架設されている地域の石炭はサハリン内で使い、鉄道が敷設されていない西海岸の「エストロ」地域(豊畑、塔路 等々)から採炭された石炭は船舶便で日本本土に持ってきて軍需物資を作るために使いました。しかし、戦争が急迫し、アメリカの爆撃で船舶運送が不可能になると、日本はこの地域にいた朝鮮人の炭鉱夫たちを日本本土に連れて行きました。特に、当時豊畑炭鉱だけでも 142 人のうち 42 人の炭鉱夫たちは、寒くて見知らぬこのサハリン地域に自分の妻と幼い子どもを置き去りにしなければいけなかったのです。しかし、日本人たちは、彼らこそが太平洋戦争の後方戦士と褒め称えました。そのため、サハリンに残った家族たちは、喜んで涙一滴も見せられず、夫と父を見送るしかなかったのです。

그러나 가장을 잃어버리고 고아처럼 버려진 그들을 돌보는 사람은 아무도 없었습니다. 따라서 그 남은 가족들은 말할 수 없는 고통속에서 오늘날까지 눈물로 나날을 살아가지 않으면 안 되었습니다. 그 후 1945년, 태평양전쟁이 끝나자 일본정부는 사할린 내에 살고 있는 40만명의 일본사람은 바빠 일본으로 귀국시켰지만 특별 후방전사라고 데려간 이중징용사들은 사할린에 기다리는 가족들에게 보내지 않았습니다. 소식조차 모르는 이들의 가족들은 오늘날까지 외롭고 불쌍한 어머니를 모시고 어린 동생들과 함께 굶주림과 혈벗음에 고난의 삶을 살아왔었습니다.

しかし家長を失くして孤児のように捨てられた彼らの面倒を見てくれる人々は誰もいませんでした。そのため、残られた家族たちは語り切れない苦痛の中で、今日に至るまで涙を流す毎日を送ってこなければならなかったです。1945年、太平洋戦争が終わると日本政府はサハリン内に住んでいる40万名(原文ママ)の日本人は急いで日本に帰国させました。しかし、特別後方戦士と褒め称えながら連れて行った二重徴用者たちはサハリンで待っている家族たちの元に帰してくれませんでした。お互いの安否を知らない二重徴用者の家族は今日までさびしくて可哀相な母や幼い弟妹と共に飢えるほど苦しい生活をしてきました。

그 부인들은 영영 남편의 소식을 듣지 못한 채 모두가 세상을 떠났고, 그 자식들은 아버지의 소식을 듣지 못한 채 벌써 70고개를 넘는 백발의 노인이 되었으며, 고생을 견디지 못해 불쌍히 세상을 떠나버린 사람도 적지 않습니다. 당시 10-14세의 소년이었다던 그 자녀들도 인생 말기에 이르러 여생이 얼마 남지 않았습니다. 따라서 우리 이중징용자가 당한 고통은 일본정부가 천만금의 금액을 내놓는다 할지라도 보상될 수가 없습니다.

그리고 우리는 아버지를 팔고 사고 하는 자식들이 아납니다.

뿐만 아니라 우리 이중징용자의 자녀들은 더 이상 이 쓰라린 기억을 우리 자손들에게 물려주고 싶지 않습니다.

妻たちは、永久に夫の安否を知ることができないまま、皆がこの世を去り、子どもたちは父の安否を知ることができないまま、すでに70歳を超えた白髪の老人になり、その中には苦勞を耐えることができず、気の毒にもこの世を去った人も少なくないです。当時10-14歳の少年であった子どもたちも人生の末期に至っており、余生があまり残っていません。つまり、私たち二重徴用者の家族が経験してきた苦痛は、日本政府がいかなる金額で賠償しようとしてもできないものです。

また、私たちは父の苦しみを金と交換しようとする子どもではありません。

私たち二重徴用者の子どもたちは、これ以上辛い思いを私たちの子孫にさせたくありません。

그러므로 우리는 이 이중징용에 관한 진실을 만천하에 공개하며 이 문제 대한 일본정부의 확실한 대책을 받아낼 때까지 계속 투쟁할 것을 엄숙히성명하는 바입니다. 아울러 우리 이중징용 탄부들의 자손들은 일본정부와 단시에 관련되었던 기

업체들에게 다음과 같은 우리의 물음에 명백히 대답해줄 것을 강력히 요구하는 바입니다.

そのため、私たちは、この二重徴用に関する真実を天下に公開し、この問題に対する日本政府の確実な対策を勝ち取るまで、闘い続けることを厳粛に表明します。同時に、私たち二重徴用された炭鉱夫たちの子孫は、日本政府と当時関連していた企業に対し、次のような私たちの質問に明確に回答することを強く要求するところです。

1. 일본정부가 후방전사라고 끌고 간 우리 아버지들은 1945년 8월 15일 태평양 전쟁이 끝난 후 65년이 지나도록 사할린 땅에서 애다게 기다리고 있는 이족들에 에게왜 돌려보내지 않았습니까? 아니면 그 가족들을 우리 아버지들이 있는 곳으로 왜 데려다 주지 않았습니까?

1、日本政府は、後方戦士として連行した私たちの父親を、1945年8月15日太平洋戦争終結後、65年が過ぎ去ってなお、サハリンの地で待ち焦がれ待っている家族に、どうして返さなかったのですか。また、なぜ家族たちを私たちの父がいる場所に連れてこなかったのですか。

2. 전후 65년에 이르는 지금까지 무소식인 우리의 남편, 아버지에 대한 소식이나 그들의 생사여부들 왜 아직도 확인해 주지 않고 있습니까?

2、戦後65年に至る今日までその安否を確認することができなかった私たちの夫、父に対する知らせや彼らの生死のほどを、なぜ、いまだに確認してくれないのですか。

3. 불쌍한 우리 아버지들 이중강제징용 탄부들이 영원히 처자를 잃어버린 대가는 어디서 찾아야하고, 또 젊어서부터 죽이기까지 또는 늙어버린 지금까지 가련한 인생을 살아온 우리의 어머니들에 대한 보상은 어디에서 받아야하며 귀중한 소년의 시기와 청춘을 희생시킨 그 자녀들의 인생에 대한 댓가는 어디에서 찾아야 합니까?

3、哀れな私たちの父である二重強制徴用された炭鉱夫が、永遠に妻子を失ってしまったことに対する代価はどこから探せるのでしょうか。また、若い時から死ぬまで、あるいは年老いた現在まで、閉ざされた人生を生きてきた私たちの母に対する補償は、どこからもらわなければならないのでしょうか。さらに、貴重な子どもの時期と青春を犠牲とした子どもたちの人生に対する代価はどこで取り戻さなければならないのでしょうか。

4. 이중강용 탄부들의 처자식들 중 특히 1945년-1949년에 식량문제가 긴박했던 생활 속에서 기근과 질병으로 영원히 이 세상을 떠난 적지 않은 우리의 어머니님과 형제들에 대한 보상을 누가 책임져야 합니까?

4、二重徴用炭夫の妻子たちのうち、特に1945年—1949年に食糧問題が生じていた生活の中で、飢饉と疾病で永遠にこの世を去った少なくない母親たちと兄弟たちに対する補償は、誰が責任を持って行うべきでしょうか。

5. 이중징용 탄부들의 자녀들은 아버지를 일본정부에게 빼앗겼기 때문에 식구들의 생계를 유지하기 의해서 어린 몸으로 노동현장에서 종사하였습니다. 따라서 학교교육을 받지 못하고 소학교 정도의 지식을 소유한 채 반문맹자들이 되었습니다. 이 공백을 또 누가 매워 주겠습니까?

5、二重徴用炭鉱夫たちの子どもは父親を日本政府に奪われましたので、家族の生計を維持するために小さい体で労働現場で働きました。そのため、学校教育を受けることができず、小学校程度の知識しか持っていない半分の識字者となりました。この学校教育を受けなかったために生じた知識の空白状態は誰が埋めてくれるのでしょうか。

6. 전 징용기간, 즉 1939년-1945년간의 미지 불임금, 애국저금, 전시국채를 얼마나 물었는지 일본정부는 계산이나 해 보았습니까? 이 미청산액은 누가 청산해야 합니까?


6、徴用させられていた全期間、すなわち1939年—1945年の間、未払い賃金、愛国貯金、戦時国債をどれほど納めていたのか日本政府は計算してみたことがあるのでしょうか。この未清算金は、誰が責任を持って清算すべきでしょうか。

7. 남편없이 많은 자식들을 키우며 먹고 살기 위하여 고된 생활속에서 시달린 여성들은 마치 짐승이 그 새끼를 버리듯 눈물을 흘리며 자기 자식들을 남들에게 나누어주고 말았습니다. 이 대가는 누가 또 어떤 보상으로 매을 수 있단 말입니까?

7、夫がいない状況で、多くの子どもたちを育て、生きていくために耐えがたい生活の中で苦しんできた女性たちは、まるで動物が子どもを捨てるように涙を流しながら自分の子どもたちを他人に預けてしまいました。この対価は誰が、またどのような補償で埋めることができるのでしょうか。

이상 지적한 물질적, 정신적인 피해에 대하여 일본정부는 어떤 방식으로든지 보상해야만 할 것입니다.

以上指摘した物質的、精神的被害に対し、日本政府はどのような方式でも補償しなければならないでしょう。

2010년 3월 3일, 안명복 작성, 

2010年3月3日 安明福 